

「お化けでた目を凝らしたら古女房」

西川武彦

卒寿を越えた頃から、家で夕飯を食べることが右上がりに増えています。コロナ禍が始まる前からです。歳相応にせよ…と、身体が訴えているのでしょう。

時計の針が五時を回り、連れ合いが台所でコツコツと包丁を鳴らし始めるのを見計らって、食器棚からコツコツとワイングラスを取り出します。適温で冷やしておいたボルドーの赤の栓を抜き、リビングルームのソファに深々と沈んで、晩酌が始まります。部屋は気分によって明るさを変えられるように設計してあります。航空機内でいえば、国際線の上級クラスに似せたとでも云えましょうか。ワインは一本千円なのが情けない。

スチュワデスはいませんかから、お摘みを皿に盛り合わせ、自らワインを杯に注ぎ、黙々と傾けます。天井の色は黒く、機内の雰囲気。BGMはJALの「ジェットストリーム」から、その日の気分で選びます。

暫くすると、年老いた「客室乗務員」から、「出来たわよ」との声が響きます。血圧が高い後期高齢者向けのメインディスプレイが出来上がったようです。デリバリーはありませんから、すでにふらついているお客さまが足を運びます。客室乗務員は別メニューを召し上がります。

七時半には、満腹ですっかり出来上がり、とろんとした眼でテレビを眺めるうちに瞼が閉じます。どれくらい経ったのでしょうか、「もうベッドに行ったら…」との声が響き、目が覚めます。よろよろと寝る前の用を足し、パジャマに着替えてベッドにもぐるのが八時。

電気を消して、それから三時間も経ち、毎晩二つは見る夢の一つが終わった頃、離れて置かれている老妻用のベッドサイドに小さな明かりが灯ります。奥様がおやすみになるようです。それが刺激でぼんやりと目が覚めます。

……といった状景が毎日繰り返されるなか、ペン川柳の兼題「化ける」で詠んだ一句は、「お化けでた目を凝らしたら古女房」。別の一句は、「化けるのが下手で出世の道外れ」。お粗末でした。隠居のつぶやきです。